

A-02-5

トラクトグラフィーに着目し上肢機能向上を図った一例

¹木沢記念病院リハビリテーションセンター, ²木沢記念病院中部療護センター
○岩井香織¹, 田本織江¹, 浅野愛子², 和田哲也², 槇林優², 岡直樹², 奥村歩²,
篠田淳²

【はじめに】遷延性意識障害患者の中には動作として確認することはできないが、隠された残存機能が存在し、適切なアプローチをすることで動作遂行が可能となる症例も少なくない。今回我々は、錐体路トラクトグラフィーから神経線維は保たれているが、動作実行に結びついていないと推察される上肢に対して訓練を実施した。その結果、随意性の向上に繋がった症例を経験したので報告する。【症例と経過】頭部外傷により四肢麻痺、遷延性意識障害を呈した30歳男性。受傷後約1年が経過し当センターに転院、転院半年後OT開始した。右上肢は筋緊張亢進・筋短縮による関節可動域制限が著明だが、到達範囲は狭いもののリーチ動作（指示動作）が可能だった。一方、左上肢の筋緊張はやや低い、指示動作は困難だった。錐体路トラクトグラフィーでは両側とも同様の神経線維束が導出されたため、左上肢にも右上肢と同様の隠された残存機能が存在する可能性が示唆された。また、左上肢は右上肢と比較して筋緊張が低く関節可動域のさらなる改善が予想され、左上肢の随意性が向上すれば、今後の日常生活動作に繋がりがやすいと考え左上肢の機能訓練を積極的に実施した。【結果】現在までに3ヶ月間訓練を継続し、左上肢の関節可動域は拡大し、肩・肘関節の随意運動が出現し、リーチ動作（指示動作）が可能となり、その正確性・頻度も増加傾向にある。【まとめ】運動が確認しづらい上肢では、残存機能があったとしても見逃されやすい状態である。そのため、トラクトグラフィーなどの画像データから情報を的確に読み取り、その他の情報も勘案してリハビリの方向性を検討して提供することが重要であると考えられた。